下肢静脈瘤（かしじょうみゃくりゅう）

下肢の静脈が瘤（こぶ）状にふくれる病気です。下肢の静脈には皮膚表面近くにある表在静脈、筋膜下や筋肉内を通る深部静脈、表在静脈と深部静脈とをつなぐ穿通枝（せんつうし）があります。表在静脈の逆流防止弁が壊れ、血液の逆流が起こることが下肢静脈瘤の原因です。一般的には女性に多く、男性の 3 倍の頻度といわれています。女性の場合には妊娠、出産をきっかけに発症する人が多いです。加齢とともに悪化することが多く、また静脈瘤になりやすい体質は遺伝すると考えられています。職業とも関連があり、立ち仕事に従事される方（美容師・理容師、調理師、接客業など）に多くみられる病気です。診断は超音波検査で行い、この検査結果をもとに治療方法を検討します。

症　状

症状がなく、見た目の問題だけの方が 20%程度おられます。下肢静脈瘤の症状には下肢のだるさ、痛み、むくみ、こむら返り、かゆみなどがあります。皮膚症状として湿疹・皮膚炎、褐色の色がつく色素沈着、皮膚が硬くなる脂肪皮膚硬化症、皮膚がえぐれてしまう潰瘍などがあります。

治　療

下肢静脈瘤は自然治癒が期待できないため、少しずつ悪化します。無症状で見た目も気にされない方に関しては治療を行う必要はありませんが、下肢症状のある方や見た目を気にされる方に関しては治療を行います。湿疹や皮膚炎などの皮膚症状を伴う方はさらに脂肪皮膚硬化症、潰瘍などへ悪化してしまうことがあるので、診断がつき次第早めに手術治療を行います。脂肪皮膚硬化症になってしまった皮膚は下肢静脈瘤治療を行っても元に戻ることは期待できません。

下肢静脈瘤の治療は大きく分けて 2 つであり、**圧迫療法**（弾性ストッキングあるいは弾性包帯での圧迫）と手術治療です。圧迫療法の目的は下肢のだるさやこむら返り、痛みなどの下肢症状を改善させることであり、見た目の改善や静脈瘤そのものの治癒は期待できません。**手術治療**は下肢静脈瘤の原因となっている静脈自体に対して治療を行います。現在は保険診療で血管内焼灼術（レーザー、ラジオ波）が可能となり、切開をせずとも従来のストリッピング手術と同等の治療成績となっています。焼灼術だけでは静脈瘤が残存することが予想される場合には静脈瘤切除や硬化療法を追加することもあります。焼灼術の適応にならないクモの巣状あるいは網目状静脈瘤といった皮膚表面の細かな静脈瘤の場合には硬化療法単独での治療を行います。

下肢静脈瘤が疑われる場合には医療機関を受診し、超音波検査できちんと診断してもらうことがよいと思います。

【写真】さまざまな下肢静脈瘤（A－E）

下肢表面の静脈瘤が目立つ A だけでなく、B では脂肪皮膚硬化症、C ではさらに皮膚潰瘍も伴っている。
軽い静脈瘤の場合にはクモの巣状静脈瘤 D、網目状静脈瘤 E のみのことがある。

【血管外科診療部長　出津　明仁】